

平成30年度 第1回 小牧市文化財保護審議会次第

平成31年1月24日(木) 午後2時
小牧市役所 東庁舎4階 本会議用控室

1 教育長あいさつ

2 会長あいさつ

3 議題

(1) 市指定文化財候補物件について

【資料1】

4 報告

(1) 平成29年度文化財保護事業について

【資料2】

(2) 平成30年度文化財保護事業(中間報告)について

【資料3】

5 その他

【資料 1】

市指定文化財候補物件について

- ・有形文化財 絵画 正眼寺釈迦涅槃図 1 幅 正眼寺
- ・有形文化財 彫刻 木造千手観音菩薩立像 1 軀 小松寺
- ・有形文化財 彫刻 木造地藏菩薩坐像 1 軀 小松寺



29小教生第146号

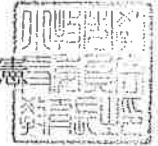
平成29年4月12日

小牧市文化財保護審議会

会長 池田 洋子 様

小牧市教育委員会

教育長 安藤 和



小牧市指定文化財の指定について（諮問）

このことについて、下記物件の指定について、小牧市文化財保護条例第41条の規定により、貴審議会の意見を求めます。

記

- | | |
|----------|-------------------|
| 1 種 別 | 有形文化財 絵画 |
| 2 名称及び員数 | 正眼寺釈迦涅槃図 一幅 |
| 3 所有者の住所 | 小牧市大字三ツ渕29 |
| 氏名 | 青松山 正眼寺 代表者 江川 辰三 |



指 定 調 書



平成29年4月10日

(あて先) 小牧市教育委員会

住 所 愛知県小牧市三ツ淵29
氏 名 青松山 正眼寺
代表者 江川 辰三

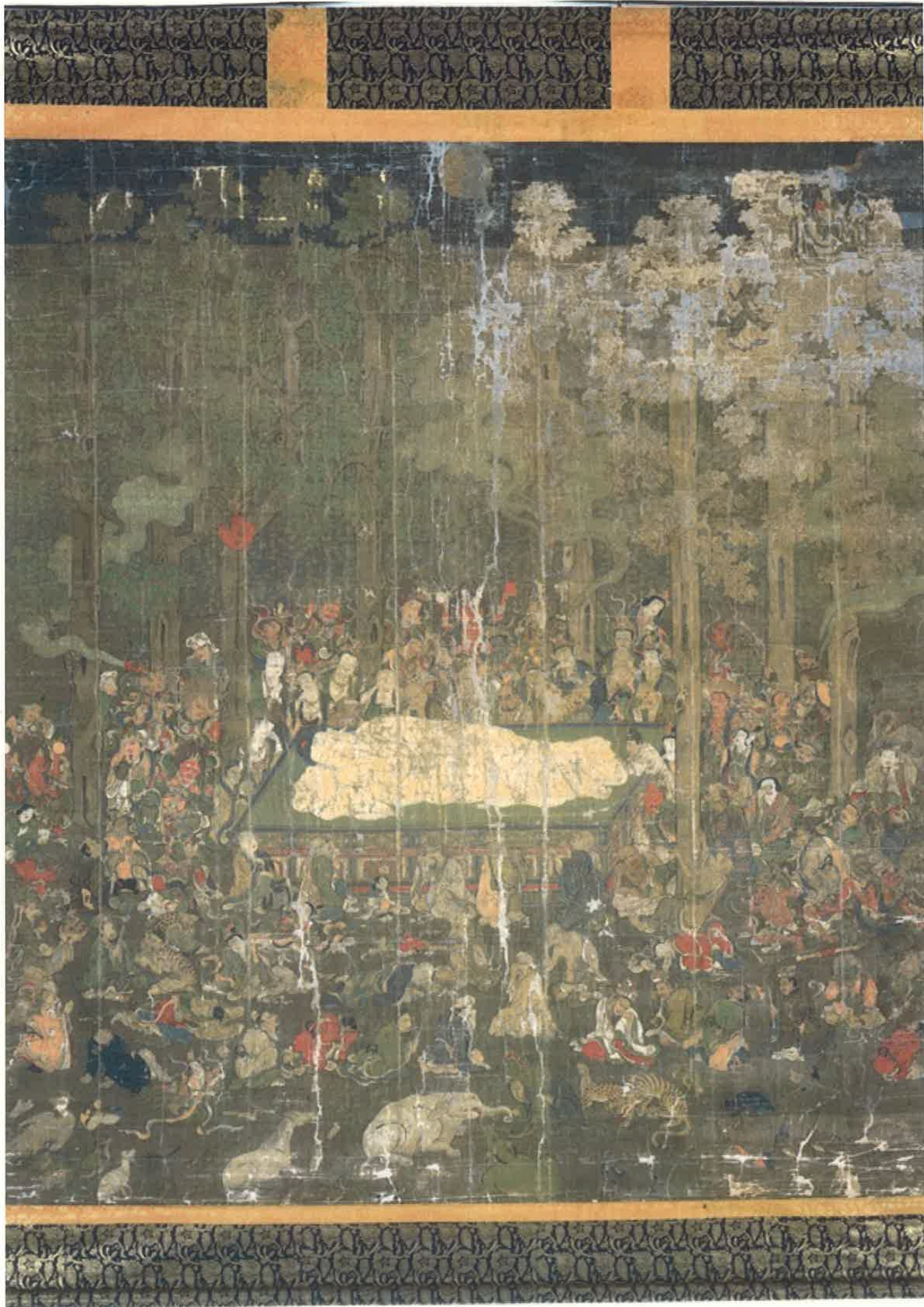
小牧市文化財保護条例の規定による市指定有形文化財の指定を受けたいので、下記のとおり調書を提出します。

記

- 1 種別及び名称
絵画 正眼寺釈迦涅槃図
- 2 員数
一幅
- 3 所在の場所
愛知学院大学 日進キャンパス図書館保管室 愛知県日進市岩崎町阿良池12
- 4 所有者等の氏名(名称)及び住所
青松山 正眼寺 愛知県小牧市三ツ淵29
- 5 現状(品質、形状、構造、重量、大きさ、地積等)
軸装、絹本着色、縦309.4cm 横270.1cm
慶応元年(1865)に修復された記録がある。
- 6 由来及び沿革
南北朝時代の作成とみられる。
- 7 微証、伝説、作者等
不明
- 8 その他参考となるべき事項
応永元年(1394)正眼寺開山。

(添付書類)

- 1 現状を示すキャビネ型写真及び幻灯用スライド
- 2 地積図(史跡、名勝又は天然記念物の場合)
- 3 当該文化財の重要性及び保護の必要性を示す参考書類
『愛知県史 別編 文化財2 絵画』当該絵画掲載頁



9

仏涅槃図^{ぶつねはんず}

正眼寺（小牧市）

南北朝時代 一四世紀

軸装 絹本着色 二幅

縦三〇九・四 横二七〇・一



釈迦の入滅の情景を描いた涅槃図で、縦が三mを超え、南北朝時代の涅槃図としては最大級のものである。画絹は、約四三cmの絹を五副継ぎ、左に約二八cm、右に約二五cmの絹を継いだ七副一鋪である。釈迦は右手枕して右脇を下にして宝床の上に横た

わり、宝床は釈迦の足下（向かって右）の側面が見える角度で描かれている。釈迦の姿は鎌倉時代以降にみられる新形式であるが、宝床は平安時代からみられる古い形式である。参集者は、菩薩・仏弟子・俗形男女・天部ら総勢九十三体あり、他に比べ非常に多い。画面右上には飛来する摩耶夫人の一行四体が描かれる。動物は六十一体描かれる。

釈迦は大振りに描かれているが、繊細な裁金文様が施されている。参集者も大振りであるが、着衣には細かな彩色文が施されており、その対比が興味深い。慶応元年（一八六五）の修理を記した裏書があり、文禄の役の際に朝鮮からもたらされたものと記されている。『尾張名所図会』などにもこの伝承が見られるが、本図は明らかに日本の絵画であり、この伝承は事実ではない。

正眼寺は、もともと現在の一宮市丹陽町の伝法寺跡に創建された寺院で、現地に移ったのは元禄二年（二六八九）である。また同寺には飛鳥時代の誕生釈迦仏が伝わっており、灌仏会や涅槃会が盛んに行われていたことが推測される。これら誕生仏や涅槃図の伝来は必ずしも明確ではないが、釈迦信仰に基づいた寺院であったことがうかがわれる。（渡邊里志）

参考文献

- 『小牧の文化財 第三集』小牧市教育委員会、一九七二年
- 『正眼寺文書目録』愛知学院大学附属図書館、一九七三年
- 『小牧市史 資料編1』小牧市、一九七五年

正眼寺 仏涅槃図調査報告

仏涅槃図 1 幅

正眼寺（愛知県小牧市大字三ッ渚 29）

2017 年 3 月 10 日（金）調査

小牧市文化財保護審議会委員、小牧市教育委員会

〔概要〕

正眼寺は、応永元年（1394）、後小松天皇を開基、通幻寂霊禅師を開山とし、愛知県一宮市丹陽町（旧・中島郡下津村）に創建された、尾張地方最古の曹洞宗禅寺である。応永五年（1398）、足利義満より寺領寄進、応永当時は七堂伽藍を備え、塔頭 28 院の尾張国禅林第一の臣刹、青松山正眼寺であった。

しかし、当地での度重なる洪水被害を避けて、元禄二年（1689）現在地小牧市大字三ッ渚に移転した。

今回調査対象の仏涅槃図は、現在愛知学院大学図書館に寄託され、そこで当該寺院での法要 3 月 10 日に調査する。それに先立ち 2 月 15 日涅槃会に愛知学院講堂にて一般公開の折に一度拝見した。

寺伝によると、文禄の役の折秀吉が朝鮮から持ち帰ったという（正眼寺文書）。

仏涅槃図は釈迦伝記最後の秘蹟である釈迦入滅の情景を一画面に描くものである。釈迦の命日 2 月 15 日の涅槃会の本尊として用いられるもので各宗派寺院に伝わる。

名称 釈迦涅槃図

作者 不詳

素材 絹本着彩

サイズ 縦 309.4 × 横 270.1 cm

（画絹 43 cm 幅の 5 幅継ぎと左約 28 cm と右約 25 cm の絹と継ぐ 7 幅 1 舗）

〔現状〕

最上部と下辺部の傷みが激しく、下辺部に下地の紙が見える事から、裏打ちがなく、直接紙に貼られていることがわかる。

裏書きに修理記述「大破に付き今度表相改」、「慶応元年(1865)7 月」「表具師名古屋巾下藤衛門」ある。

〔画面描写状況〕



サイズが縦 3m 横 2.7m で、巨大な涅槃図である。愛知県内では一宮妙興寺 3.3m × 2.9m に次ぐ大きさである。

釈迦が宝台上に右手枕して、右脇を下に、膝を曲げ、両足を重ねて横たわる、鎌倉期以降の釈迦の姿に描かれる。特徴的なことは、右手指が頭の後ろにまわり、その肘の下に法衣が敷かれる。肘の下に法衣が敷かれる釈迦像は、高麗の長崎最教寺八相涅槃図の他、鎌倉時代制作の涅槃図にみられる。

釈迦の身体は 皆金色に金の截金で直線的で繊細な雷文様が施される。

画面中央よりやや下に置かれる宝台は釈迦の足元側の側面(向かって右側面)が見られる角度に描かれる古い形式である。宝台は奥が広がる逆遠近になるがそれほどの広がりはない。

釈迦の宝台周囲の参集者たちが3重に取り囲む。そのため宝台辺りが広く大きく空間をとっている。参集者には菩薩・仏弟子・僧俗男女・天部らが数多くいる。

釈迦の頭の近くには悲しげな表情の菩薩たちが、宝台の奥から足元にかけて目を袖で抑えたり大きく口を開けたりする仏弟子達が囲む。仏弟子たちは宋画の羅漢図風に描かれる。

宝台足元に拝足する人物が描かれる。人物は俗人の老婆姿に描く(本来は迦葉だが毘舍離城老婆)。その着衣が上に大袖衣をつけていない。ほとんどの参集者の着衣には細かな彩色文が施されているにもかかわらず模様無し白布筒袖の衣姿に描かれる。しかし微かに大袖を付けていた下描き線が残る。その衣の所どころ影が付いている。着衣の線に若干肥瘦がある。

宝台足元周辺に女性や俗人が多い。

宝台頭上に捧飯する俗体人物(純陀)がいる。

宝床手前には僧俗男女が多くいる。宝台手前縁に迦葉童子がいる。その手前、宝台手前の参集人物たちの中央に阿難昏倒が描かれ、その右に阿那律が鉢を左腕に抱えて右手で頭上に水を振りかけている。常滑市東龍寺本の描写型に近いが、一宮市明光寺本やあま市甚目寺本・稲沢市無量光寺本にも右手の伸ばし方の傾斜角度が急であるが同じ描写がみられる。

耆婆大臣風の人物が右下に描かれる。その後ろにも掲げ物を入れた鉢を上に掲げる俗体人物がいる。また、職人風の3人も描かれる。

中央上方中央に満月が掛かる。

画面右上方に摩耶夫人らが阿那律に先導されて飛来する。飛雲はゆっくり横に靡く穏やかな形状で最後尾は右に残る。阿那律が一段下がって摩耶夫人らより前方を進む。妙興寺本・甚目寺本同様に翳の形態が丸い。

沙羅双樹の配置が中央の宝台を避けるように左右に振り分けてある。妙興寺本・甚目寺本同様。長崎最教寺本も同様。さらに、宝台の足元の拝足人物が見やすいようにその部分の沙羅樹が後ろに退っている。釈迦頭上近くの本の沙羅樹に釈迦の錫杖と鉢を包む包みが掛けられる。

沙羅双樹は釈迦の足元四本の葉が白変(枯渴)している。沙羅樹は、垂直にまっすぐにほとんど太さを変えないで伸びる。

跋提河が樹間に見える。

釈迦の枕元・体・足元の3方向から3筋瑞雲が昇る。湧雲は、知恩院本が3筋の雲を枕元から立ち上らせ湧きあがらせるなど鎌倉期の涅槃図によくみられる。

画面最下端に60体余りの動物たちが描かれる。その中央に、横座りのように座す白象と向かい合う座型の獅子がいる。釈迦三尊形式を意識した象獅子の相對型がみられる。

虎豹馬などの他、迦陵頻伽や龍といった想像上の生き物やカタツムリなどの昆虫までも描く

〔総括〕

釈迦の姿は鎌倉以降の新様式で、法台は右側面からの視線で古い形式である。

登場人物は拝足する老婆・捧飯純陀・阿難昏倒・耆婆大臣・阿那律に先導されて飛來摩耶夫人ら・職人 3 人など…涅槃図に登場する人物モチーフの型をほとんど網羅する参集者がコンパクトにまとめられて 93 体描かれる。他の愛知の涅槃図に比べても多い方である。

動物たちも座して対面する白象と獅子を中央に置き、虎豹馬などの他、迦陵頻伽や龍といった想像上の生き物やカタツムリなどの昆虫までも描く…これらも涅槃図に描かれる多種の生物が 60 体余描かれている。

沙羅双樹の表現や湧雲の存在など、鎌倉以降の涅槃図の図様も多く描かれる。

このように本涅槃図は日本の涅槃図に見られるモチーフの型がほとんど描き込まれるものである。

そこで日本での制作と考えられる。朝鮮から請来との伝承とは異なる。但し、釈迦の姿態は高麗涅槃図の長崎最教寺八相涅槃図に似た型が使われている。

制作期は南北朝時代末 14 世紀末から室町時代前半 15 世紀前半と考えられる。

正眼寺の創建された、応永元年（1394）に近い頃と考えられる。

池田洋子



29小教生第262号
平成29年5月12日

小牧市文化財保護審議会
会長 池田洋子様

小牧市教育委員会
教育長 安藤和憲



小牧市指定文化財の指定について（諮問）
このことについて、下記物件の指定について、小牧市文化財保護条例第41条の規定により、貴審議会の意見を求めます。

記

番号	種別	名称及び員数	所有者の住所・氏名
1	有形文化財 彫刻	木造千手観音菩薩立像 一躯	小牧市大字小松寺1121 宗教法人 小松寺 代表役員 二橋正良
2	有形文化財 彫刻	木造地藏菩薩坐像 一躯	小牧市大字小松寺1121 宗教法人 小松寺 代表役員 二橋正良



指 定 調 書



平成29年4月20日

(あて先) 小牧市教育委員会

住 所 愛知県小牧市大字小松寺 1 1 2 1
氏 名 宗教法人 小松寺
代表役員 二橋 正良

小牧市文化財保護条例の規定による市指定有形文化財の指定を受けたいので、下記のとおり調書を提出します。

記

- 1 種別及び名称
彫刻 木造千手観音菩薩立像
- 2 員数
一軀
- 3 所在の場所
小松寺 愛知県小牧市大字小松寺 1 1 2 1
- 4 所有者等の氏名 (名称) 及び住所
宗教法人 小松寺 代表役員 二橋正良 愛知県小牧市大字小松寺 1 1 2 1
- 5 現状 (品質、形状、構造、重量、大きさ、地積等)
木造 (針葉樹) 一木造 彫眼 素木仕上げ 像高 46.3 cm
- 6 由来及び沿革
菅原道真作で、醍醐帝の持仏として宮中に奉安せられていたもので、いつの頃からか我家に伝わっていたものを、前田玄以法印が京都所司代の頃久我敦通卿により小松寺へ寄進された霊像であると伝えられる。
- 7 微証、伝説、作者等
不明
- 8 その他参考となるべき事項
承久年中 (1219~1221) に兵火のために堂坊が焼失し、その後 250 年程廃寺同様であったが、文明年間 (1469~1487) に再興された。

(添付書類)

- 1 現状を示すキャビネ型写真及び幻灯用スライド
- 2 地積図 (史跡、名勝又は天然記念物の場合)
- 3 当該文化財の重要性及び保護の必要性を示す参考書類



小松寺本尊・千手観音菩薩立像 調査報告

調査対象 : 千手観音菩薩立像一軀

所在地 : 小松寺本堂（愛知県小牧市大字小松寺 1121）

調査年月日 : 2017 年 3 月 29 日（水）

調査員 : 小牧市文化財保護審議会委員、小牧市教育委員会

〔概要〕

小松寺は真義真言宗智山派の寺院である。承安三年（1173）、小松内大臣平重盛が改築し、寺領一千余石を寄進して小松寺と名付けたという。その後、承久の乱（1221 年）の際、兵火にかかって堂坊は焼失し廃寺同様になったが、応仁の乱（1467-1477 年）の後、全慶上人が再建した。しかし、小牧・長久手の戦い（1584 年）で豊臣方の主陣地となり、すべて焼失した。明暦三年（1657）になって本堂を再興、寺領 240 石を有した。明治維新の廃仏毀釈により廃寺となり、建物は売却されたが、本堂のみは残された。明治二十四年（1891）の濃尾地震で破損したが、同二十七年（1894）に大修理され、現在に至る。

このたび調査した本尊の千手観音菩薩立像は本堂の厨子内に納められた秘仏で、昭和五十九年（1984）に現住職の晋山式が行われた際に開帳されて以後は、今日に至るまで開帳されていない。六十年に一度の秘仏というが、昭和五十九年以前の開帳については記録がない。

伝承によると、本尊は菅原道真の御作とされ、醍醐帝の御持仏として宮中に奉安されていたもので、それがいつしか公卿久我家に伝わり、前田玄以法印が京都の所司代の頃に、久我敦通卿により小松寺へ寄進された霊像であるという。

〔法量〕（単位cm）

本体

像 高 46.3

髪際高 45.0

頭頂一顎	13.8	髪際一顎	6.5
面 幅	5.3	耳 張	7.2
面 奥	6.7	肩 張	15.5
臂 張	13.5	胸奥（左）	7.5
腹 奥	10.0	裾 張	11.3
裾 奥	7.0		

〔形状〕

本像は、髻頂に仏面、地髪上に菩薩面・瞋怒面・狗牙上出面・大笑面の十一面を配し、地髪正面に化仏（阿弥陀仏）を頂き、胸前の合掌手と腹前の宝鉢手に脇手三十八手を加えて四十二臂を数える通形の十一面千手観音菩薩立像である。やや前のめりの姿勢で框付きの蓮華座上に立つ。

頭部に天冠台（紐二条の上に蓮弁形）を彫出し、その下の地髪部正面は毛筋彫りとする。顔は丸顔で、おおらかな眉に、切れ長の眼である。眉間に白毫をあらわす。鼻と口は小ぶりにつく。眉・目・鼻・口が顔の中央にやや寄っているが、釣り気味の目のためか、理知的で凛々しい印象を受ける。耳朵環状。耳に髪一条をわたす。首に三道を刻む。さらに着脱可能な宝冠と胸飾を着けている。

上半身には斜めに条帛を着し、下半身には裳を履き、腰の部分で折り返しをつくり、腰布を巻く。さらに両肩から天衣をまとう。天衣は合掌手と宝鉢手の臂にかかったのち体側に沿って垂下させる。

光背は蓮弁形拳身光。木製、金泥塗り。台座は蓮華座、框は六角形。木製、金泥塗り。

〔品質・保存〕

木造。一木の割矧ぎ造り。素地。彫眼。白毫は木製、彩色。

脇手のすべて、頭頂の十一面、両天衣先は別材。

両足先、光背、台座、持物、宝冠、胸飾、以上各後補。

〔総括〕

このたび調査した観音像は、一木（針葉樹）の割矧ぎ造りから成る檀像風の千手観音立像で、像本体の保存状況は良好である。台座、光背、装身具は近世以降のものだが、質の高い良品である。明治の廃仏毀釈後、小松寺再興期のものであろうか。

本像は様式等から 13 世紀後半～14 世紀初め頃の鎌倉時代の作と推定される。伝承では、菅原道真の御作で醍醐帝（885-930 年、在位 897-930 年）の御持仏として宮中に奉安されていたものというが、本像はその頃のものではない。ただし醍醐帝の時代（平安時代前期）には檀像風の仏像が広く作られたことからすれば、本像が平安の古像（霊像）を意識して再興されたものであった可能性はあるかもしれない。また本像は、のちに京都の久我家に伝来し、前田玄以法印（小松寺の檀家、豊臣政権の五奉行の一人）が京都の所司代の頃に、久我敦通卿により小松寺へ寄進された霊像であるという。たしかに本像の像容は都風の洗練されたもので、地方的な像ではない。京都の久我家より寄進された霊像であったというのは事実かもしれない。

（文責：小野佳代）



写真1 千手観音菩薩立像（台座・光背付き）



写真2 千手観音菩薩立像（正面）



写真3 千手観音菩薩立像（左側面）



写真4 千手観音菩薩立像（背面）



写真5 千手観音菩薩立像（面部）



写真6 千手観音菩薩立像（頭上面）



写真7 千手観音菩薩立像（像底）

写真8 台座・光背



指 定 調 書



平成29年4月20日

(あて先) 小牧市教育委員会

住 所 愛知県小牧市大字小松寺1121
氏 名 宗教法人 小松寺
代表役員 二橋 正良

小牧市文化財保護条例の規定による市指定有形文化財の指定を受けたいので、下記のとおり調書を提出します。

記

1 種別及び名称

彫刻 木造地蔵菩薩坐像

2 員数

一軀

3 所在の場所

小松寺 愛知県小牧市大字小松寺1121

4 所有者等の氏名(名称)及び住所

宗教法人 小松寺 代表役員 二橋正良 愛知県小牧市大字小松寺1121

5 現状(品質、形状、構造、重量、大きさ、地積等)

ヒノキ材 寄木造 玉眼嵌入 像表面布貼 彩色仕上げ

像高49.0cm

6 由来及び沿革

不明

7 微証、伝説、作者等

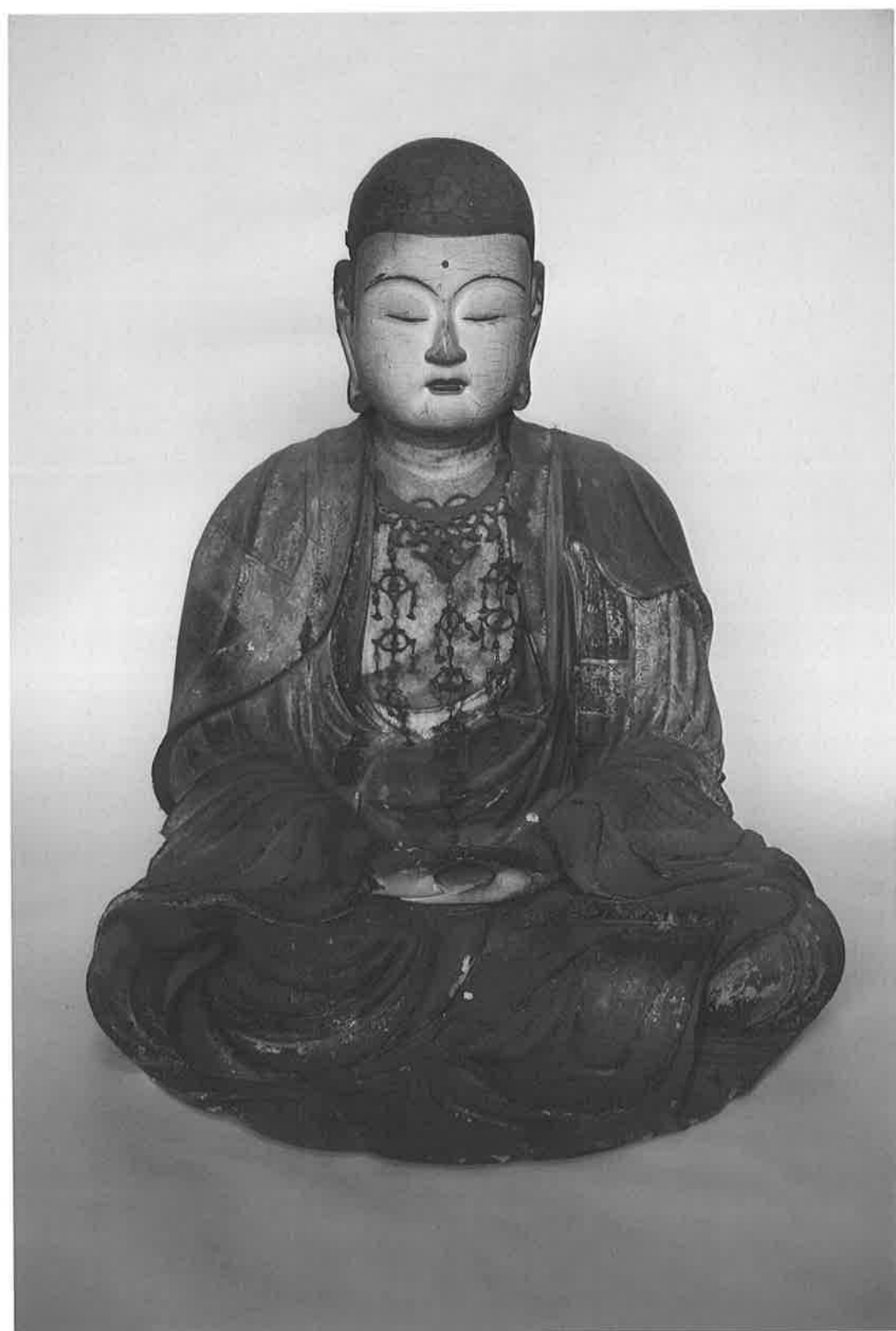
不明

8 その他参考となるべき事項

承久年中(1219~1221)に兵火のために堂坊が焼失し、その後250年程廃寺同様であったが、文明年間(1469~1487)に再興された。

(添付書類)

- 1 現状を示すキャビネ型写真及び幻灯用スライド
- 2 地積図(史跡、名勝又は天然記念物の場合)
- 3 当該文化財の重要性及び保護の必要性を示す参考書類



小松寺・地藏菩薩坐像 調査報告

調査対象 : 地藏菩薩坐像一軀

所在地 : 小松寺付属建物内 (愛知県小牧市大字小松寺 1121)

調査年月日 : 2016 年 5 月 19 日

調査員 : 小牧市文化財保護審議会委員、小牧市教育委員会職員

〔概要〕

小松寺は大字小松寺にあり、真義真言宗智山派長福寺の末寺である。承安三年(1173年)、小松内大臣平重盛が改築し、寺領一千余石を寄進して小松寺と名付けたという。その後、承久の乱(1221年)の際、兵火にかかって堂坊は焼失し廃寺同様になったが、応仁の乱(1467-1477年)の後、全慶上人が再建した。しかし、小松・長久手の戦い(1584年)で豊臣方の主陣地となり、すべて焼失した。明暦三年(1657年)になって本堂を再興、寺領 240 石を有した。明治維新の廃仏毀釈により廃寺となり、建物は売却されたが、本堂のみは残された。明治 24 年(1891年)の濃尾地震で破損したが、同 27 年(1894年)に大修理され、現在に至っている※1 (詳細は年表参照)。

調査対象の地藏菩薩坐像は、現状では、本堂と庫裡をつなぐ付属建物内に、十王像とともに安置されている(写真1)。地藏菩薩坐像の来歴は不明。

※1 小松寺の概要は『小牧市史』本文編(小牧市史編集委員会、昭和五十二年、618 頁)によった。



写真1 地藏菩薩坐像と十王像(小松寺付属建物内)

〔法量〕

像高	49.0cm	髪際高	42.5cm
面張	9.0cm	面奥	13.0cm
肩張	28.0cm	臂張	32.0cm
膝張	39.0cm		
像底縦	37.4cm	像底横（幅）	36.8cm



写真2 地藏菩薩坐像 正面

〔形状〕

本像は、腹前で定印を結び、方形の台座上で結跏趺坐する、木造・彩色の地藏菩薩坐像である。通例の地藏菩薩像とは異なり、手に宝珠と錫杖を持たない（写真2）。

頭部は円頂とし、わずかな段をつけて髪際をあらわす。眉はおおらかな弧線を描き、目は細く切れ長で、伏目がちとし、鼻と口は丸みを帯びる。額の中央には白毫をつくり、豊頬で円満な相好にあらわす。耳朶は環状貫通とし、首には三道を刻む（写真3）。

服制は、上半身に內衣、覆肩衣、納衣をまとい、下半身に裙を着す。納衣は両肩を覆い、左肩正面で大きな折り返しをつくり、衣の端を左肩から後ろに垂らす（写真4）。



写真3 地藏菩薩坐像 面部



写真4 地藏菩薩坐像 背面

〔構造〕

ヒノキ材とみられる寄木造で、玉眼を嵌入する。体幹部は前後二材矧ぎで、三道下で割首とする。この根幹部材に、両体側部、両脚部、両手先を別材でつくり、寄せる。像表面は布貼を施し、彩色仕上げとする。

顔や手など肉身部は白、唇は赤で彩色され、眉は墨で描く。衣部はすべて彩色が施され、葉文、菊華文、雲文、六つ星文などの文様をあらわす。文様は盛り上げによる彩色で、切金が使われる箇所もある。像の頭部、根幹部、両体側部は彩色が比較的に残る（写真5）。胸飾は銅製透かし彫りで、瓔珞・垂飾が付属する。

像底は布貼りされる（写真6）。布の下に像の根幹部、両体側部、両脚部の矧ぎ目が確認できる。また像底に二箇所、布貼りのない長方形がある。これは本来、足柄があった箇所と思われ、現在の方形の台座に置く際に足柄を切断した、その跡であろう。したがって、造立当初は別の台座に柄で固定されていたはずである。

光背（後補）は輪光で、三箇所に火炎宝珠をつける。光背の支柱は方形の台座（後補）に固定されている。



写真5 地蔵菩薩坐像 背面下方



写真6 地蔵菩薩坐像 像底

〔総括〕

本像は、保存状況は比較的良好で、修理跡は見当たらない。彩色については当初か否かは断定しがたいが、本像とともに安置されている十王像（江戸時代のものか）の彩色と比べると、文様の種類も色も異なっており、本像の方が繊細で優れている。本像の彩色が盛り上げによっている点も考え合わせると、当初の彩色である可能性を残す。

本像の特徴は、肩幅のある四角いフォルムと、左肩正面で衣の折り返しをつくり、それと呼応するかのように脚部の衣文に曲がりの強い曲線を多用している点（写真7）で、南北朝時代から室町時代の院派仏師の仏像によく見られるものである（写真8・9）。



写真7 地蔵菩薩坐像 正面



写真8 普賢菩薩坐像 静岡・方広寺
院古・院広・院遵作
観応3年(1352年)



写真9 釈迦如来坐像 愛知・妙興寺
院遵(文殊)・院口(普賢)作
貞治4年(1365年)頃

院派作品と本像を比較すると、全体のフォルムや、折り返しや曲線の強い衣文処理のほか、納衣を通肩にまとう着衣形式などに共通性がみられる。しかし一方で、院派作品にみられる中国趣味を継承した、あくの強い顔立ちは本像にはみられず、顔の印象はむしろ穏やかである。また衣の厚みも院派作品よりも薄く、繊細な印象を受ける。

以上から、本像は院派風であることは間違いないものの、南北朝時代から室町時代は、他派の仏師も少なからず院派の影響を受けていたことから、本像の作者が院派か否かは現時点では確定できない。

概要でも述べたように、小松寺は応仁の乱で焼失しており、文明年間(1469-1487)に住職となった全慶上人が伽藍を復興している。『東春日井郡史』によれば、文明15年(1483)に伽藍が再建されたという。この点を踏まえるならば、本像も伽藍の復興とともに文明年間に造立された15世紀後半、つまり室町時代に制作された可能性が考えられる。ただし本像を様式的にみるならば、南北朝時代の院派作品から極端にかけ離れておらず、制作年代は15世紀後半よりも遡る可能性が高い。現状においては、南北朝時代後期から室町時代前半にかけての制作と推定されよう。(文責：小野佳代)

※ 写真8・9は、山本勉著『日本の美術 493・南北朝時代の彫刻』(至文堂、2007年)より掲載。

■小松寺 年表

和暦	西暦	出来事
天平年間		聖武天皇の勅願によって行基菩薩が開創したと伝える。『尾張志』
承安三年	1173	小松内大臣・平重盛が平氏荘園の味岡荘に衰微した小松寺を再興。七堂伽藍を建て、千余石の寺領を寄進する。ここにおいて小松寺と称した。『東春日井郡史』
平安末		平重衡、鎌倉下向の際、旧領の小松寺に一泊した。『旧勝蓮州録』
承久の乱	1221	承久の乱後、平家滅亡により、寺は衰運に向かう。乱後は、法華寺にて法灯を保つ。以後、小松寺は約 250 年、廃寺のまま。
応仁の乱	1467-1477	応仁の乱の頃、小松寺、荒廃。
文明年間	1469-1487	全慶上人が住職になる。現在地に移転し、七堂伽藍十二坊を建立・再興した。中興の祖。
文明十五年	1483	住僧全慶、奉加勸進して再建した。『東春日井郡史』 5 月、全慶、没す。
天文・天正	1534-1582	第五世及慶の代に、織田信長より寺領を寄進され、祈願所となる。
天正七年	1579	織田信長より寺領を安堵される。
天正十年	1582	織田信雄より寺領を安堵される。
天正十二年	1584	小牧・長久手の戦いの際、豊臣方の三好秀次の陣となった。現在小松寺に、豊臣秀吉、池田忠興、森長可の花押のある天正 13 年 3 月の小松寺宛ての禁制書あり。合戦の後、豊臣軍引き上げに際し、丹羽長秀軍の放った火で殿堂・坊舎・宝物等が灰燼に帰す。僧たちも四方に離散。『東春日井郡史』
慶長年中	1596-1615	住僧及慶の求願により、京都所司代前田徳善院玄以法印大檀那となり寺堂を建立したが、焼失。『東春日井郡史』
文禄四年	1595	豊臣秀吉、小松寺に 236 石の寺領を与える。朱印状現存。
元和七年	1621	尾張藩祖徳川義直、小松寺に小松寺村の当時の石・242 石 9 斗 6 升を寺領として与え、以後江戸時代そのままの状態で明治を迎える。『塩尻』巻 50 尾州寺社證印年月
正保三年	1646	小松寺、鰐口作られる。刻銘あり
明暦三年	1657	小松寺、本が再建される。
元禄元年	1688	小松寺、釣灯籠作られる。刻銘あり
明治元年	1868	明治維新、寺は廃寺。仁王門はじめその他諸建築、悉く売却。
明治十四年	1881	本堂のみ難を逃れて、小松寺再興となる。

【参考文献】

「小松寺略誌」(『東春日井郡史』等をまとめたもの、小松寺)

『小牧叢書 10 小松寺文書』(小牧市文化財資料研究会編、小牧市教育委員会、1986 年)

「小松寺—沿革と古文書—」(小牧市教育委員会、昭和 59 年)

平成29年度文化財保護事業について

1 史跡小牧山整備・管理事業【小牧山課所管事業】

(1) 整備事業

①史跡小牧山整備関係委員会

審議会の開催 5月31日、2月26日

専門委員会の開催 11月21日、2月22日

②主郭地区の整備

- ・史跡小牧山主郭地区第10次発掘調査〔国庫補助事業〕

期間：7月19日～1月17日

概要：主郭（山頂部分）西側斜面の発掘調査

調査面積100㎡ 石垣2列（虎口）

現地説明会 11月19日 参加者数：約500名

三次元計測及び石垣石材調査委託・ビデオ記録撮影委託・埋戻等工事

- ・「史跡小牧山主郭地区第9次発掘調査概要報告書」の刊行

③（仮称）史跡センター関連の整備

- ・建設工事のうち建築工事（次年度へ繰越）〔国庫補助事業〕
- ・建設工事のうち電気設備工事（次年度へ繰越）〔国庫補助事業〕
- ・建設工事のうち機械設備工事（次年度へ繰越）〔国庫補助事業〕
- ・建設工事監理業務委託（次年度へ繰越）〔国庫補助事業〕
- ・周辺整備工事（次年度へ繰越）〔国庫補助事業〕
- ・周辺整備工事監理業務委託（次年度へ繰越）〔国庫補助事業〕
- ・周辺新管理道部分整備実施設計業務委託〔国庫補助事業〕

（仮称）史跡センター西側へ続く新管理道の設計

④小牧市役所旧本庁舎跡地の整備〔国庫補助事業〕

- ・「史跡小牧山整備事業報告書2（小牧市役所旧本庁舎跡地）」の刊行

(2) 管理事業

①史跡公園内休憩施設清掃等委託

休憩施設、史跡公園内説明板等の清掃

②園路修繕工事

山北橋～土塁断面展示施設間の土舗装園路の修繕

2 埋蔵文化財に関する事業【以下、生涯学習課所管事業】

(1) 遺跡範囲確認調査

①東田中宮前遺跡（東田中）

6月21日～7月19日、12月6日～12月18日

96㎡ 溝（中世）、ピット（中世以降）、山茶碗、土師質土器

②西之海道遺跡（下小針天神三）

7月10日～7月18日 2㎡ 溝（近世以降）、山茶碗

③市之久田北浦遺跡（小牧五）

7月25日～7月26日 4㎡ ピット（時期不明）

④宇都宮神社古墳（小木三）

9月20日～9月29日 3㎡ 不明遺構（時期不明）

⑤牛屋遺跡（西之島）

11月1日～11月6日 9㎡ 遺構なし、山茶碗

⑥南外山遺跡（南外山）

11月27日～12月1日 7㎡ 遺構なし、須恵器、山茶碗、土師質土器

⑦南外山遺跡（南外山）

12月19日～12月22日 7㎡ 遺構なし、山茶碗

⑧小牧池田遺跡（堀の内四）

2月15日～2月21日 10㎡ 遺構なし、山茶碗

⑨牛屋遺跡（西之島）

3月1日～3月2日 4㎡ 遺構なし、山茶碗

(2) 遺物等整理作業

4月3日～3月30日 上記調査分他

(3) 「市内遺跡発掘調査報告書（24）」の刊行

平成27・28年度実施の発掘調査概要報告、遺跡範囲確認調査報告

3 調査・資料収集

(1) 文化財保護審議会

審議会 5月26日

先進地視察 8月23・31日 妙興寺（一宮市）他

(2) 文化財資料研究員会

研究員会 全体会5回、小委員会3回

第2回小牧検定の開催

(3) 民俗資料の収集

4件 箱階段、消防用半纏、漆膳セット、みずや他

4 文化財環境整備事業

(1) 指定文化財等の除草及び剪定委託

①切支丹灯籠周辺、岩崎山公園内岩屋古墳、高根遺跡、コモウセンゴケ群落、大草のマメナシ自生地、史跡小牧山主郭下法面・虎口a、史跡小牧山バス専用駐車場、芋塚句碑用地、蟹清水砦跡用地、岸田家北環境整備用地の除草、剪定

②史跡大山廃寺塔跡 登山道周辺の除草、トイレ清掃

(2) 小牧小学校校庭のクロマツ病虫害防除委託、剪定委託、腐朽防止対策委託

(3) 文化財説明板設置工事

新設(3基): 田縣神社豊年祭の御輿行列(お練り)、江崎善左衛門宗度の墓、

江崎善左衛門了也頌徳碑

移設及び板面張替え(1基): 上街道と藤塚の一里塚

5 文化財普及啓発事業

(1) 文化財啓発事業調査研究委託

委託先: 学校法人足立学園

①文化財調査研究業務

小牧市文化財啓発事業調査研究受託委員会(研究員7名)を組織

委員会3回開催

②講座等の開催

・古文書入門講座

1月13・20・27日・2月3・17日・3月10・17日 全7回

「江戸期の古文書の解読と文言特有の意味・時代背景等を学ぶ」

講師: 元愛知文教大学研究員 萩原淳也氏

受講者数: 54名

・歴史基礎講座

6月24日 「尾張徳川家と小牧山 誰が小牧山を守ってきたか」

講師: 徳川美術館参与 佐藤豊三氏 受講者数: 54名

7月1日 「自然豊かな小牧」

講師: 自然観察指導員 清水豊氏 受講者数: 52名

7月8日 身近な文化財を訪ねて「上街道を歩いて」

講師: 小牧市文化財保護審議会委員 西川菊次郎氏 受講者数: 34名

・歴史講座『織田信長をめぐる人々Ⅲ』

11月11日 「織田信長と徳川家康」

講師: 國學院大學兼任講師 平野明夫氏 受講者数: 189名

11月18日 「織田信長と三職推任一太政大臣か関白か将軍か」

講師：共立女子大学教授 堀新氏

受講者数：167名

11月25日 「宣教師と信長」

講師：元岐阜県歴史博物館長 高木洋氏 受講者数：161名

12月2日 「信長と子供―嫡男信忠を中心に―」

講師：戦国史研究家 和田裕弘氏 受講者数：179名

12月9日 「『信長公記』作者大田牛一から見た織田信長」

講師：東京大学史料編纂所准教授 金子拓氏

受講者数：197名

・戦国時代と食講座

10月29日 2回

戦国時代と食についてのクイズ

湯漬けや焼き味噌などを再現調理し、食体験

講師：愛知文教女子短期大学副学長・教授 安藤京子氏

愛知文教女子短期大学講師 西澤早紀子氏 受講者数：25名

③文化財巡りの開催

11月12日 「小牧市小牧地区 旧街道沿いを中心に」

講師：小牧市文化財地図（篠岡地区）作成委員会

篠田徹氏・加藤憲吾氏・酒向道夫氏・水野弘氏・西川菊次郎氏

参加者数：18名

④ 信長文庫の收集整理

織田信長、小牧山城等に関する史資料135冊を收集整理

⑤小牧市文化財地図（北里地区）の作成

（2）こまき信長・夢フォーラム5「小牧から岐阜へ～信長が居た4年間～」の開催

9月17日 小牧市市民会館ホール 参加者数：約600名

第1部 史跡小牧山主郭地区第9次発掘調査成果報告

報告者：小牧市教育委員会 小野友記子

第2部 記念講演「小牧から天下統一の城へ」

講演者：滋賀県立大学教授 中井均氏

公益財団法人日本城郭協会理事学術委員会副委員長 加藤理文氏

第3部 トークセッション テーマ「信長が居た4年間、信長に追いかけられた18年間」

パネリスト 上記講演者・報告者

(3) 第2回こまき検定の開催

2月4日 小牧市役所

小牧の歴史に関する問題を30題出題し、21問以上正解で合格

参加者数：39名（合格者数：33名・満点17名）

(4) 小牧山山頂付近への車両による送迎の実施

市内在住満70歳以上で自力の登頂が難しい方等の送迎

6月7日（2回運行） 参加者数：11名

10月25日（1回運行） 参加者数：10名

(5) 小牧山国史跡指定90周年記念「小牧山の歴史～昭和 平成 そして未来へ～」

12月18日～12月27日 小牧市役所本庁舎1階 展示スペース

9～11月に歴史館で開催した展示の再展示

6 市指定文化財保存団体等への育成援助

(1) 市指定文化財補助金

保存・伝承・公開等の事業

- ・大草棒の手保存会、野口棒の手保存会、小牧山車保存会、五本棒オマント奉納神事保存会

(2) 一般コミュニティ助成事業

- ・聖王車保存会 聖王車の車軸交換、修理

(3) 市指定文化財管理謝礼 19件

7 歴史館に関する事業

(1) 歴史館施設管理委託

小牧市施設活用協会を指定管理者として任意指定

施設及び設備の維持管理、施設運営他

入場者数：64,761名（28年度比較8,874名減）

①自主事業

- ・甲冑試着会

4月16日 参加者数：50名、5月14日 参加者数：36名

10月8日 参加者数：49名、11月5日 参加者数：53名

- ・小牧山城本丸跡茶会 4月29日 参加者数：160名

11月4日 参加者数：180名

- ・企画展「小牧山歴史探検」

7月21日～9月20日 期間中入館者数：8,422名

- ・小牧山国史跡指定90周年記念企画展「小牧山の歴史～昭和 平成 そして未来へ～」

昭和2年から現在までの小牧山の歴史と今後の史跡整備について紹介

9月22日～11月15日 期間中入館者数：7,766名

- ・館内ガイド 市内歴史ボランティア団体により多客時の日曜日、祝日に実施

4月6回 5月7回 9月6回 10月5回 11月3回

(2) ・ミニ企画展「ひなまつり」

2月17日～4月19日 期間中入館者数：20,053名

- ・企画展「小牧山の花」(メナード美術館「所蔵企画展 花」との連携企画)

小牧山の植物(樹木・野草)で花を咲かせるものの一部を紹介。

5月19日～7月19日 期間中入館者数：6,910名

(3) 歴史館運営委員会

2月19日

平成30年度文化財保護事業（中間報告）について

1 史跡小牧山整備・管理事業【小牧山課所管事業】

（1）整備事業

①史跡小牧山整備関係委員会

審議会の開催 12月26日

専門委員会の開催 12月22日

②主郭地区の整備

- ・史跡小牧山主郭地区第11次発掘調査 約520㎡
- ・主郭地区整備基本計画修正委託

③小牧山城史跡情報館（愛称：れきしるこまき）関連の整備

- ・建設工事のうち建築工事（前年度からの繰越）〔国庫補助事業〕
- ・建設工事のうち電気設備工事（前年度からの繰越）〔国庫補助事業〕
- ・建設工事のうち機械設備工事（前年度からの繰越）〔国庫補助事業〕
- ・建設工事監理業務委託（前年度からの繰越）〔国庫補助事業〕
- ・展示制作委託〔国庫補助事業〕
- ・周辺整備工事（前年度からの繰越）〔国庫補助事業〕
- ・周辺整備工事監理業務委託（前年度からの繰越）〔国庫補助事業〕
- ・周辺新管理道部分整備工事
- ・周辺新管理道部分整備工事監理業務委託

④史跡小牧山保存活用計画の策定

次年度にかけて2年計画で策定

支援委託〔国庫補助事業〕

委員会の開催 4月15日、12月22日

⑤小牧山周辺の整備

忠魂碑南西部土地の整備

- ・整備工事測量設計業務委託
- ・整備工事

（2）管理事業

①史跡公園内休憩施設清掃等委託

休憩施設、史跡公園内説明板、旧本庁舎跡地整備範囲内溝等の清掃

②史跡小牧山除草及び剪定委託

主郭地区発掘調査終了部分、虎口a、市役所旧本庁舎跡地整備地、小牧山城史跡情報館建設工事敷地西側発掘調査終了部分、バス専用駐車場

2 埋蔵文化財に関する事業【以下、生涯学習課所管事業】

(1) 遺跡範囲確認調査

①小牧山東遺跡（小牧五丁目）

6月14日～6月21日 8㎡ 溝・ピット（近世）、土師質土器

②小針堂地遺跡（小針二丁目）

7月3日～7月10日 6㎡ 遺構なし、山茶碗

③光善寺遺跡（小針一丁目）

7月12日～18日 8㎡ 溝（近世）、山茶碗、陶磁器

④天王塚遺跡（文津）

8月20～31日 11㎡ 土坑・ピット（弥生～中世）、井戸（近世）、弥生土器、灰釉陶器、山茶碗

(2) 発掘調査

①藤島町居屋敷遺跡（藤島町居屋敷）

5月21日～6月14日 24㎡ 土坑（中世）、溝（中近世）、土師質土器、山茶碗

②天王塚遺跡（文津）

11月7日～12月21日 52㎡ 土坑・ピット（中世以降）、井戸（近世）、弥生土器、土師質土器、山茶碗

(3) 出土品整理作業

昨年度までの調査分他

3 文化財環境整備事業

(1) 指定文化財等の除草及び剪定委託

①切支丹灯籠周辺、岩崎山公園内岩屋古墳、高根遺跡、コモウセンゴケ群落、大草のマメナシ自生地、芋塚句碑用地、蟹清水砦跡用地、岸田家北環境整備用地の除草、剪定

②史跡大山廃寺塔跡 登山道周辺の除草、トイレ清掃

(2) 小牧小学校校庭のクロマツ病虫害防除委託・剪定委託

4 調査、資料収集

(1) 文化財保護審議会

審議会 1月24日

(2) 文化財資料研究員会

全体会4回、小委員会3回

第3回こまき検定 2月3日予定

(3) 民俗資料の収集

3件、図書、飯櫃他

5 文化財普及啓発事業

(1) 文化財啓発事業調査委託

委託先：学校法人足立学園

①講座等の開催

・古文書入門講座

初級編 11月24日、12月8日、12月15日 受講者数：48名

中級編 1月26日、2月2・9・16日予定

講師：元愛知文教大学研究員 萩原淳也氏

・歴史文化基礎講座—小牧の歴史を学ぶ—

6月30日 「古代の小牧 山村の里から」

講師：NPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク理事長

赤塚次郎氏 受講者数：54名

7月7日 「信長時代の小牧」

講師：信長文献収集家 唐松健夫氏 受講者数：53名

7月14日 「江崎家と小牧宿」

講師：愛知文教大学非常勤講師 藤堂修一氏 受講者数：48名

・歴史講座『戦国・信長そして小牧山』

10月27日 「戦国期室町幕府と織田信長」

講師：大正大学専任講師 木下昌規氏 受講者数：187名

11月3日 「織田信長の中国計略」

講師：(株)歴史と文化の研究所代表取締役 渡邊大門氏

受講者数：173名

11月17日 「織田・明智体制」の成立と崩壊

講師：歴史研究家 小林正信氏 受講者数：181名

1 2月1日 「信長の城ー日本城郭の革命ー」

講師：滋賀県立大学教授 中井均氏 受講者数：206人

1 2月8日 「小牧山城と信長評価」

講師：東京大学史料編纂所教授 本郷和人氏 受講者数：212人

・食講座

8月5日 夏休み親子食講座

切り寿司や里芋を使ったぼた餅を作り、食体験

変わりさば寿司の作り方を学ぶ

講師：郷土料理研究家・栄養士 志村八寿江氏

受講者数：18人（大人：8名、小人：10名）

11月11日 小牧の伝統食講座「わが小牧の郷土食」

アジ寿司、里芋ぼた餅作り、食体験

変わりさば寿司の作り方を学ぶ

講師：郷土料理研究家・栄養士 志村八寿江氏 受講者数：20名

②文化財巡り

6月23日 味岡地区

講師：篠田徹他文化財地図作成委員会メンバー 参加者数：24名

10月14日 北里地区

講師：篠田徹他文化財地図作成委員会メンバー 参加者数：26名

(2) 小牧山山頂付近への車両による送迎の実施

市内在住満70歳以上で自力の登頂が難しい方等の送迎

11月27日 参加者数：7人、12月5日 参加者数：3人

(3) 文化財図書の増刷

小牧叢書10「小松寺文書」 200冊

小牧叢書16「小牧山城」 400冊

6 市指定文化財保存団体等への育成援助

(1) 市指定文化財補助金

- ・野口棒の手保存会 ・大草棒の手保存会
- ・小牧山車保存会 ・五本棒オマント奉納神事保存会

(2) 一般コミュニティ助成事業

- ・西王母車保存会 西王母車のからくり人形の修理、からくり機構の調整

7 歴史館の管理運営

(1) こまき市民文化財団[指定管理者]に施設・設備の維持管理、施設管理を委託
自主事業

- ・ 甲冑試着会

4月22日 参加者数：60人、5月5日 参加者数：72人

11月11日 参加者数：60人、11月25日 参加者数：56人

- ・ 小牧山城本丸茶会

4月29日 参加者数：175人、11月3日 参加者数：186人

- ・ ジュニア写真展「小牧山で出会った昆虫たち」

7月20日～9月17日 期間中入館者数：6, 163人

- ・ 上記写真展関連イベント「小牧山の昆虫を探してみよう」

8月31日 参加者数：19人

- ・ 企画展「歴史館誕生50年—小牧市の歩みと変遷—」

11月16日～12月28日 期間中入館者数：5, 766人

- ・ 館内ガイド 4・5月の日曜・祝日

(2) ミニ企画展示「端午の節句」

4月20日～5月16日 土雛や昭和の五月人形を展示

期間中入館者数：7, 729人

【案】

有形文化財 絵画

名称 ^{しゃかねはんず}
釈迦涅槃図 1 幅

所在地 日進市岩崎町阿良池 1 2
(愛知学院大学日進キャンパス図書館保管室)

所有者 ^{しょうげんじ}
正眼寺 (小牧市大字三ツ渕 2 9 番地)

法寸・素材 軸装 縦 309.4cm 横 270.1cm 絹本著色

制作時期 南北朝時代末期から室町時代前半(14 世紀末から 15 世紀)

指定理由

本図は、釈迦が入滅する情景を描く釈迦涅槃図で、寺院の涅槃会の本尊として用いられ、正眼寺における涅槃会の本尊である。本図は、縦が 3 m を超える大きさが目を引く。

本尊釈迦は、右側面からの視点で描かれている古い形式の宝台の上に皆金色で右腕を頭の下にして右脇を下にする側臥形式で膝を曲げ、両足を重ねた鎌倉期以降の新しい形式で表現されている。画面中央上方に満月が掛かり、右上阿那^{あな}律^{りつ}の案内で摩耶夫人^{まやぶにん}が飛来する構成も同様である。古い形式と新形式混交がみられる南北朝・室町期の特質がある。

^{さらしゅうじゅ}沙羅双樹は宝台の正面を避けて、頭上に 4 本(内 1 本に釈迦の錫杖と鉢を包む包みが掛けられる)、足元に葉が白変した 4 本が配置される形式は甚目寺本や妙興寺本など愛知県内近隣寺院本と同様である。釈迦枕元・体・足元から湧き昇る 3 本の瑞雲が、枕元から昇る 3 筋の湧雲のある知恩院本同様にある。

描かれた参集者は、日本の涅槃図に描かれた涅槃説話モチーフのほとんどを網羅しており、93 体がコンパクトにまとめられる。釈迦の着衣の^{きりかね}截金や参集

者の着衣の文様などが細緻で、一人一人が丁寧に描かれている。動物や昆虫も同様に、多種の生物が61体描かれている。桃山時代に近づくにつれてますます種類が多くなるが、その先駆けのような作品である。

文禄の役の折に豊臣秀吉が朝鮮から持ち帰ったという記述が、慶応元年(1865)の修理の記録とともに裏書されている。しかし、日本にしか生息しない動物が描かれていることなどから考えて、正眼寺開基のころ、南北朝時代末期から室町時代前半(14世紀末から15世紀)に日本で制作された作品としてよいと思われる。

本図は、涅槃会が小牧においても行われていたことを伝えるもので、3mを超える大きさや描かれた参集者の多さには特筆すべきものがある。南北朝時代末期から室町時代前半の涅槃図として重要な作品といえる。

描写内容

本図に描かれる内容の概要は次のとおりである。

画面中央よりやや下方に右側面が見える角度で描かれている宝台上に、釈迦は、右手枕で右手指は頭の後ろにまわり、その肘下に法衣が敷かれる。右脇を下にして膝を曲げ、両足を重ねて横たわる釈迦は金色の体色・金截金を施した金色の着衣の皆金色で表される。截金文様は雷紋など直線構成のものが主である。輪郭は墨で括られている。

釈迦の周りを頭部に菩薩、足元に仏弟子達、その外に僧俗男女、さらに外周に天部ら多くの参集者が三重に取り囲んでいる。釈迦の頭上に捧飯する純陀^{じゆんだ}、その近くに悲しげな表情の菩薩、宝台の奥から足元にかけては、目を袖で押さえたり、大きく口を開けたりする仏弟子が宋画の羅漢風に描かれる。宝台足元周辺には女性や俗人が多く、毘舍離城^{びしゃりじょう}老婆が拝足している。宝台手前には多くの僧俗男女、迦葉童子^{かしよう}がおり、その手前には阿難倒昏^{あなん}が描かれ、その右に鉢を左腕に抱えて右手で頭上に水を振り掛ける阿那律が描かれる。画面右下には耆^ぎ

婆大臣風の人物、その後ろに掲げ物を入れた鉢を上に掲げる俗体人物、また職人風の三人も描かれる。

画面中央最上部に満月が掛かり、右上方に阿那律に先導された摩耶夫人らが飛来する。飛雲はゆっくり横に靡く穏やかな形状で最後尾は右に残る。沙羅双樹は垂直にほとんど太さを変えずにまっすぐに伸び、宝台を避けるように左右に振り分けて配置され、その樹間には跋提河^{ばったいが}が見える。宝台足元の沙羅樹は拝足人物が見やすいようにその部分は後ろに退き、その四本の沙羅双樹の葉は白変（枯渴）している。釈迦頭上近くの一本の沙羅樹に釈迦の錫杖と鉢を包む包みが掛けられている。釈迦の枕元、体、足元の三方向から三筋の瑞雲が昇る。

画面最下端には、虎、豹、馬などの他、迦陵頻伽^{かりょうびんが}や龍といった想像上の生き物やカタツムリなど60体余りの動物が描かれる。中央には、横座りのように座す白象と向かい合う座型の獅子がいる。

正眼寺は、応永元年（1394）、後小松天皇を開基、通幻寂霊禅師を開山として愛知県一宮市丹陽町（旧・中島郡下津村）¹に創建された尾張地方最古の曹洞禅寺である。応永五年（1398）、足利義満より寺領が寄進され、応永往時は七堂伽藍を備え、塔頭28か院あり、尾張国禅林第一の巨刹であり青松山正眼寺と称した。飛鳥時代の誕生釈迦仏があり、禅宗寺院としての釈迦信仰の盛んな様が伺われる。元禄二年（1689）、度重なる洪水の被害のため、現在地小牧市大字三ッ渕に移転した。

¹毘舍離城老婆の着衣は、下描にある大袖を描かずに、下着の小袖のみを描いている。

〈参 考〉

【用語解説】

あ な り つ

阿那律・・・釈迦のいとこ。十大弟子の一人で、天眼第一といわれた。

あ な ん

阿難・・・釈迦のいとこ。十大弟子の一人。侍者として25年間釈迦につかえた。多聞第一とよばれる。

か り ょ う び ん が

迦陵頻伽・・・想像上の鳥。美しく妙なる鳴き声を持つとされる鳥。人頭鳥身の姿で表される。

き り か ね

截金・・・焼き合わせを行い厚みを持たせた箔を、細い線や三角、四角、菱形などの小片に截り、これを貼り付けて図様や文様を表す技法。

さ ら そ う じ ゅ

沙羅双樹・・・インド原産のフタバガキ科の高木。

ね は ん え

涅槃会・・・二月十五日、釈尊入滅の日に行う法会。

ま や ぶ に ん

摩耶夫人・・・釈迦の母。

涅槃図の形式について

日本の涅槃図には、大別して新旧二つの形式がある。

古い形式は、日本現存最古の応徳三年（1086）銘がある和歌山県金剛峯寺の涅槃図をはじめとして、平安時代後期から鎌倉時代にかけて制作されたものが多い。釈迦の姿は、両手を体につけて伸ばし、体も真っ直ぐに伸ばして宝台に仰臥もしくは横臥する。宝台は向かって右側面が見えるように描かれ、釈迦の足元の方から見た構図になっている。摩耶夫人は描かれたり描かれなかったりで、参集者は少なく静的な表現である。動物は、平安時代後期は動物がいなか、いてもシシだけあるいは数種の動物だけで、鎌倉時代になると、次第に増加していく。図の形は横長か正方形に近い形が多い。

新しい形式は、鎌倉時代から登場して以降主流となる。釈迦の姿は、右手を曲げて手枕とし、右脇を下にして、両膝を曲げて両足を上下に重ねて横臥する。宝台は向かって左側面が見えるように描かれ、釈迦の頭の方から見た構図になっている。摩耶夫人は描く場合が多く、参集者は経典に説かれる様子を描き、人数は多く動的な表現である。動物は、経典に出てくる動物が増えるとともに、経典に登場しない日本の身近な動物も描き加えられるようになり、その数は増加していく。図の形は縦長の形が多い。

なお、鎌倉時代になると、新旧の形式が入り混じった作品があらわれる。

【引用・参考文献】（発行順）

名古屋市博物館編 『企画展 尾張の仏教美術 涅槃図 一描かれた釈迦入滅の情景一』

1997 名古屋市博物館

中村元他 『岩波 仏教辞典 第二版』 2002 岩波書店

愛知県史編さん委員会 『愛知県史 別編 文化財2 絵画』 2011 愛知県

【案】

有形文化財 彫刻

もくぞうせんじゅかんのん ぼ さつりゅうぞう
名 称 木造千手観音菩薩立像 1 軀

所在地 小牧市小松寺三丁目15番地

所有者 宗教法人 小松寺

現 状 像高46.3cm

木造（針葉樹）^{わりは}割矧ぎ造り ^{ちようがん}彫眼 素木仕上げ

時 代 鎌倉時代

指定理由

本像は小松寺本堂の^{しゆみだん}須弥壇上の厨子内に秘仏本尊として安置される。^{けいちよう}髻頂に仏面、^{じはつ}地髪上に菩薩面・^{しんぬ}瞋怒面・^{くがじようしゅつ}狗牙上出面・^{たいしやう}大笑面の十一面を配し、地髪正面に^{けぶつ}化仏（阿弥陀仏）を頂き、胸前の^{がっしやうしゅ}合掌手と腹前の^{ほうはつしゅ}宝鉢手に脇手三十八手を加えて四十二臂を数える通形の十一面千手観音菩薩立像である。やや前のめりの姿勢で框付きの蓮華座上に立つ。

頭部に^{てんかん}天冠台（紐二条の上に蓮弁形）を彫出し、その下の地髪部正面は^{けすじ}毛筋彫りとする。顔は丸顔で、おおらかな眉に、切れ長の眼（彫眼）である。眉間に^{びやく}白毫をあらわす。鼻と口は小ぶりにつくる。眉・目・鼻・口が顔の中央にやや寄っているが、釣り気味の目のためか、理知的で凛々しい印象を受ける。^{じだ}耳朶は環状貫通とし、耳の中央に髪の本束がU字形にかかる。首に^{さんどう}三道を刻む。さらに着脱可能な^{ほうかん}宝冠と胸飾を着けている。

上半身には斜めに^{じやうはく}条帛を着し、下半身には裳を履き、腰の部分で折り返しをつくり、^{てんね}腰布を巻く。さらに両肩から天衣をまとう。天衣は合掌手と宝鉢手の臂にかかったのち体側に沿って垂下させる。

本像は一木（針葉樹）の割矧ぎ造りによる檀像風の千手観音立像で、像本体

の保存状況は良好である。台座、光背、装身具は近世以降のものだが、質の高い良品である。

本像は様式等から 13 世紀後半から 14 世紀初め頃の鎌倉時代の作と推定される。伝承によると、本像は京都の久我家に伝来し、前田玄以法印（小松寺の檀家、豊臣政権の五奉行の一人）が京都の所司代の頃に、久我敦通卿により小松寺へ寄進された霊像であるという。たしかに本像の像容は都風の洗練されたもので、地方的な像ではない。小像ながら鎌倉時代の貴重な像であると推定される。

【案】

有形文化財 彫刻

名称 ^{もくぞう じ ぞう ぼ さつ ざ ぞう}木造地蔵菩薩坐像 1 軀

所在地 小牧市小松寺三丁目 15 番地

所有者 宗教法人 小松寺

現 状 像高 49.0 cm

ヒノキ材 寄木造 ^{ぎよくがん}玉眼嵌入 像表面布貼 彩色仕上げ

時 代 南北朝時代から室町時代

指定理由

本像は、腹前で ^{じょういん}定印を結び、方形の台座上で ^{けっかふざ}結跏趺坐する、木造・彩色の地蔵菩薩坐像である。通例の地蔵菩薩像とは異なり、手に宝珠と錫杖を持たない。現状では、本堂と庫裡をつなぐ付属建物内に、十王像とともに安置されている。

頭部は円頂とし、わずかな段をつけて髪際をあらわす。眉はおおらかな弧線を描き、目は細く切れ長で、伏目がちとし、鼻と口は丸みを帯びる。額の中央には ^{びやくごう}白毫をつくり、豊頬で円満な相好にあらわす。 ^{しだ}耳朶は環状貫通とし、首には ^{さんどう}三道を刻む。上半身に ^{ないえ}內衣、 ^{ふくけんえ}覆肩衣、 ^{のうえ}納衣をまとい、下半身に ^{くん}裙を着す。

ヒノキ材による寄木造で、玉眼を嵌入する。体幹部は前後二材矧ぎで、三道下で ^{わりくび}割首とする。この根幹部材に、両体側部、両脚部、両手先を別材でつくり、寄せる。像表面は布貼を施し、彩色仕上げとする。顔や手など肉身部は白、唇は赤で彩色され、眉は墨で描く。衣部はすべて彩色が施され、葉文、菊華文、雲文、六つ星文などの文様をあらわす。文様は盛り上げによる彩色で、 ^{きりかね}切金が使われる箇所もある。胸飾は銅製透かし彫りで、 ^{ようらく}瓔珞・垂飾が付属する。

本像の特徴は、肩幅のある四角いフォルムと、左肩正面で衣の折り返しをつくり、それと呼応するかのように脚部の衣文に曲がりの強い曲線を多用してい

〈参考〉

【用語解説】

一木造（いちぼくづくり）・・・頭部と胴体を一本の木から彫り出す技法。

玉眼（ぎよくがん）・・・木彫り像の眼に水晶を嵌め込む技法。

切金（截金）（きりかね）・・・金箔を細く切って衣文や文様を表現する技法。

結跏趺坐（けっかふざ）・・・仏教における坐法。両足を交差させて組み、足背でそれぞれ反対のももを押さえて坐るのを全跏趺坐といい、左右どちらかの足背で、他方のももを押さえて坐るのを半跏趺坐という。右足を上に組むのを「吉祥座」、左足が上になるのを「降魔坐」という。

化仏（けぶつ）・・・現生に仮に顕れた仏の姿。仏像の頭上あるいは光背などに、標識として取り付けられた小形の像。

三道（さんどう）・・・喉元にある三本のしわ。悟りに至るまでの修行の三段階を示す。

地藏菩薩（じぞうぼくしつ）・・・諸苦に耐える菩提心の堅固さ、慈悲の深さを象徴する菩薩。

十一面（じゅういちめん）・・・基本は、頭上に仏面、正面に菩薩面（慈悲の表情）が三面（または二面）、向かって右に瞋怒面（怒りの表情）が三面、向かって左に狗牙上出面（白い歯を見せて微笑む）が三面、後頭部に大笑面（悪行を笑い飛ばす）が一面となる。

須弥壇（しゅみだん）・・・仏堂内の仏像等を安置する壇。仏教世界の中心に聳え立つ高い山・須弥山に由来する。

定印（じょういん）・・・如来等の坐像の印相のひとつ。悟りを開くために瞑想する時（禅定）の印相。

条帛（じょうはく）・・・左肩から右脇腹に斜め（袈裟掛け）にかけている帯状の布。

厨子（ずし）・・・仏像等を安置する龕。箱形と小建築形（宮殿）に大別される。

千手観音菩薩（せんじゆかんのんぼくしつ）・・・一切の衆生を利益し安樂を与える菩薩。あらゆる人々の苦悩を救済する無限の力があると説かれ、特に地獄に落ちた者を済度する観音と位置付けられている。

壇像（だんざう）・・・壇木で造った仏像。素材の制約から比較的小像が多く、木肌の美しさや素材の香を生かすため素地仕上げとしている。カヤなどを用いたものを代用壇像という。

彫眼（ちようがん）・・・木彫り像で眼を彫出して表す技法。

天衣（てんね）・・・ショールのように肩にかけてまとう長い衣。体の前や横に垂らす。

天冠台（てんかんだい）・・・頭の周りにかぶる輪。

南北朝時代（なんぼくちようじだい）・・・1336（建武3/延元1）年の建武政権の崩壊から1392（明德3/元中9）南朝消滅に至る両朝併立期をさす時代概念。

白毫（びやくごう）・・・仏の両眉にあつて、右に巻き、光明を放つという毛。

室町時代（むろまちじだい）・・・広義には、幕府が存在した1336（建武3）年から1573（天正1）年まで、狭義には、前期の南北朝期を除いて1392（明德3）年から、後期の戦国時代を除いて応仁・文明の乱（1467～77年）あるいは明応の政変（1493年）

までの、幕府の盛期をさす。

裳（^{しん}）・・・腰の部分に布を巻いた腰衣。

瓔珞（^{ようらく}）・・・珠玉や貴金属を糸で繋いでつくるインドの装身具。仏教では、菩薩や天部などの胸元を飾ったり、天蓋の装飾に用いる。

蓮華座（^{れんげざ}）・・・蓮華をかたどった台座。

割首（^{わりくび}）・・・首周りにノミを入れて頭を割り短く技法。

割短ぎ造り（^{わりはつづ}）・・・木彫像の制作過程で、像を前後あるいは左右にノミを入れて割り放ち、内割りを施した上で、再び短ぎ合わせる技法。

【仏像各部の名称】



【菩薩】

【引用・参考文献】（発行順）

金田一春彦他監修 『新世紀ビジュアル大辞典』 1998 学習研究社

永原慶二監修 『岩波日本史辞典』 1999 岩波書店

真鍋俊照編 『日本仏教辞典』 2005 吉川弘文館

愛知県史編さん委員会編 『愛知県史 別編 文化財2 絵画』 2011 愛知県

愛知県史編さん委員会編 『愛知県史 別編 文化財3 彫刻』 2013 愛知県

頼富本宏監修 『お寺検定公式テキスト 仏像の教科書』 2014 樺出版社

薬師寺君子著 『写真・図解 日本の仏像 この一冊ですべてがわかる！』 2017 西東社